

[2] たなばた発表会の実践

(1) 単元設定の意図

日本の伝統的な文化である「たなばた」の行事を取り上げその行事を楽しむとともに、1学期が終わろうとしている7月上旬に、1学期に生活や学習してきた成果を家の人やお客さんの前で発表する機会を設けたいと考えて、このたなばた発表会の単元を設定した。この発表会は、小学部の合同の行事ではあるが、個に応じた題材選定や支援ができるように、出しものはクラス単位で発表することとした。






おうちの人とダンスをして
楽しむ子どもたち

子どもたちは、この単元の劇づくりの学習のなかで、なりたい登場人物を選んだり、その動きを考えたりすること、また、作りたい招待状のデザインや出す人、あるいは短冊に書くことなどを自己選択し、自分で選ぶ喜びを味わうこと、そして、発表会のための環境整備をしたり、高学年の子どもたちは、プログラムを作ったり進行をしたりして、発表会の運営にも参加すること、さらに、1学期の遊びの時間や音楽の学習でしたゲームや歌をみんなで楽しむことなど、多くの力をつけることができると考えて、単元設定をした。

指導にあたっては、できるだけ自分たちで考えたり、教師と一緒に決定したりできるように必要な支援をする。また、事前の意欲の高まり（あたため）や前単元とのつながりを丁寧にして、無理のない流れの中で進め、児童が主体的に取り組んでいけるよう配慮する。

(2) 各クラスの実践

	1組（劇づくりを中心に）	2組（劇づくりを中心に）	3組（劇と発表会の運営を中心に）
教師の意図	<ul style="list-style-type: none"> ・6月ごろから子どもたち同士の関わりが少しずつ見られるようになった。この関わりが少しでも広がるようにする。 ・たくさんのお客さんの前で発表し、お客さんに喜んでもらったりほめてもらったりすることで自信を持つようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・クラスみんなで協力・分担しあって一つの出し物を発表していくことで、クラスの連帯感を強める。 ・得意なことを発表し合う中で、友だちを認め合えるクラス作りをしていきたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今までつけてきた見通しを生かして、自信を持って取り組ませる。また、今年転校してきた子どもたちには、その場その場で丁寧に教え、その結果できたことに対して、認め、自信や成就感を持たせたい。 ・プログラム作り、司会への取り組みを通して、発表会の運営の一端を担う。
題材の設定	<ul style="list-style-type: none"> ・日頃から好きで親しんでいた物語である。 ・ストーリーが簡潔であり、場の移動が少ないので、見通しが立てやすい。 ・一人ひとりが生かされる場を設定し易い。 ・以上のような理由から、「3匹のこぶた」を選定した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・得意なことや好きなことを取り入れた発表をすることで、子どもたちの意欲を高め、自信につなげる。 ・今までの単元や学習の内容を劇の中に盛り込み、できそうだという期待感や見通しが持ちやすい「2くみは友だちがいっぱい」の自作の劇を発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・たなばた発表会をする学習の流れの中で、読む書くの学習を、行っていく。そのため、国語教材として取り扱われている「スイミー」を選定する。 ・できるだけ、子どもたちの手で配役を決めたり台詞や動作を考えたりする。

	 <p>支援されながら演じるS子</p>	<ul style="list-style-type: none"> 特に、新しいことや見通しのないことには、適応しにくいT男に対して、見通しの持ちやすい内容を選定する。 	 <p>司会するE子</p>
支 援	<p>(PLANの段階で)</p> <ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが得意なものを劇のなかに取り入れていった。 導入にペープサート劇を取り入れ興味が持てるようにした。 遊びの中で「変身」という言葉を意識して用いた。 単純な場の設定と繰り返しを取り入れ、見通しを立て易くした。 <p>(DOの段階で) ・劇の本、テープを渡し、家庭でも繰り返し、見聞きできるようにした。</p>	<p>(PLANの段階で)</p> <ul style="list-style-type: none"> 一人ひとりが好きなことを取り入れ、生きる場面の設定。 見通しの立ちやすい劇の進行と場の設定、動きやすい曲の選定。 <p>(DOの段階で)</p> <ul style="list-style-type: none"> 劇の中の小道具の大きさや個に応じた教材の配慮等を行い、失敗しない配慮やできる状況づくりをした。 本物の掃除機やかぶりもの等、子どもたちの喜ぶような小道具の使用した。 	<p>(DOの段階で)</p> <ul style="list-style-type: none"> 初めての経験だった司会のE子側にいて、文の始めの音を言う、不安感を少なくする等の支援をした。 自ら「スイミーをしたい」と言ったB男は、ステージでは、声が出せなかった。N男の声を録音してその声に合わせて演じた。 劇の進行の見通しが持てるような音楽を使用した。
取 り 組 み の 様 子 と 評 価	<ul style="list-style-type: none"> Y子…繰り返すうちに自信を持ち大きな声で発表した。 S子…自分の好きな歌の場面では楽しそうに、自信をもって発表した。 K男…やりたいという気持ちと失敗したくないという気持ちの間で葛藤しながら、友だちの応援に励まされ、最後までやり遂げた。自分が考えたダンスではリーダーシップをとっていた。 劇づくりを通して、子ども同士の関わりがより強まっていった。 	 <p>個に応じた道具を用いて演じるR子</p> <ul style="list-style-type: none"> T男が見通しをもって、喜んで練習に参加した。 自分の出番には、喜び、はりきって演じる子どもたちの姿が見られた。 劇づくりを通して、クラスのまとまりがさらに強まった。 	<ul style="list-style-type: none"> 司会をしたE子や挨拶をしたC子には、今後このような経験を繰り返すことによって、支援を少なくし自分の力でできるようになっていきたい。 B男の、人前ではしゃべることができないという問題点がクローズアップされた。長い目で考えていきたい。 劇づくりの過程で、子ども同士お互いの良い面も悪い面も、理解していった。その結果、クラスの仲間として少しずつ認め合うようになった。

(3) 反省と課題

- 全体的には、いきいきとした子どもたちの姿が見られ、子どもたちは、成就感や達成感を持つことができた発表会だったと思う。
- それぞれのクラスや子どもたちの実態にあった適切な題材の選定が行われた。また、教師が身近にいて子どもたちを理解しているからこそできる支援を行ってきたように見受けられた。しかし、その支援がもっとも適切であったかどうかは、さらに検討し、また、学習過程での支援についても、もっとミクロな視点で研究していく必要があると反省している。

(倉)